

JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

March 31, 2021 No.16

JACET 関東支部ニューズレター第 16 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

支部長 藤尾美佐 (東洋大学)

この JACET 関東支部ニューズレター第 16 号は、私が支部長在任中に発行される、最後のニューズレターとなります。私の在任期間は、正式には 2021 年 6 月総会までですが、事実上は 4 月より新しい支部長の下での運営となりますので、ここでまず、支部長在任中に様々な形で支えてくださった運営委員の皆様や会員の皆様に、衷心より御礼申し上げます。

1 期 2 年の在任期間だったものの、ちょうどオンラインへの急速な移行の時期にも当たり、当初の想像以上に様々な改革を行うことができたのは、ひとえに、運営委員の先生方の結束とサポートのおかげです。改めて御礼申し上げます。

思えば今年度は、新型コロナウイルス感染の急激な拡大により、学事暦や授業形態の変更など、多くの大学で動乱の中での幕開けとなりました。

そうした中、関東支部では、4 月の講演会のみ中止としたものの、5 月の緊急座談会、6 月の関東支部・東洋大学共催企画と、逸早くオンライン

での開催に踏み切り、また第 13 回関東支部大会の実施も見送ることなく、オンラインでの開催を実施することができました。これというのも、実は昨年度から、紀要の WEB 化の決定や (台風などの不測の場合の) オンラインでの運営会議の実施など、オンライン化に向けての土壌が既に形成されていたことが大きな背景となっています。

ここに、今年度の関東支部の活動を、支部の 4 つの柱から、振り返って参りたいと思います。

1) 関東支部大会の開催

第 13 回関東支部大会は、当初、7 月 5 日 (日) に、帝京科学大学 (千住キャンパス) にて、「英語教育と地域連携：地域から発信するグローバル・メッセージ」というテーマで開催される予定でしたが、急激なコロナ感染症の拡大により、この対面での実施を諦めざるを得なくなりました。しかしながら、急遽、大会テーマを「危機の時代と変わりゆく英語教育」と変更し、個人発表を中

目次

・ 巻頭言 JACET 関東支部長 藤尾美佐..... - 1 -	・ 支部大会運営委員会からのお知らせ 支部大会運営委員長 新井巧磨..... - 9 -
・ 第 2 回支部総会報告 支部事務局幹事 奥切恵 - 3 -	・ 支部紀要編集委員会からのお知らせ 支部紀要編集委員長 鈴木彩子..... - 10 -
・ 支部講演会委員会報告 支部講演会委員長 山本成代 - 4 -	・ 事務局だより 支部事務局幹事 奥切恵..... - 10 -
・ JACET 関東支部・東洋大学共催企画講演会 藤尾美佐 - 6 -	

心に関東支部特別企画を加え、8月29日(土)・30日(日)にオンラインでの開催を実施することができました。

今回の支部大会には285名の参加申し込みがあり、ここ数年の2倍の参加者数を記録できたことは、今後の1つのターニング・ポイントになったかと思います。限られた時間の中での決定・準備となりましたが、運営委員の先生方の卓越したお仕事ぶりのおかげで、開催に至ることができたことは、私にとっても生涯忘れられない財産となりました。改めて、運営に関わっていただいた皆様、ご発表いただいた皆様に衷心より御礼申し上げます。

この支部大会ではさらに、今回からの新しい企画として、SIGの発表・情報発信のセクションを立ち上げました。オンラインだったこともあり、他支部からのご参加もいただいたことは、今後に向けてのもう1つの、大きなターニング・ポイントにもなったと思います。

2) 関東支部講演会およびJACET 関東支部・東洋大学共催企画

関東支部では、支部運営会議の後、毎回研究会を開催しておりますが、これは運営上、関東支部講演会とJACET 関東支部・東洋大学共催企画の2つに分かれております。前者は幅広い分野での講演を、後者は講演会だけでなく、研究手法に関するワークショップなど、幅広い企画を視野に入れているため「企画」と名付けられています。4月の関東支部講演会は中止せざるを得ませんでした。その際予定されていた発表(法政大学、中谷安男先生)は、6月の関東支部・東洋大学共催企画で実現することができました(詳細は、前回のニューズレターに掲載されております)。また、10月には長田恵理先生(國學院大學)、12月には浅岡千利世先生(獨協大学)を関東支部講演会の演者としてお迎えし、盛況の下、本年度の支部講演会を終えることができました。

また、関東支部・東洋大学共催企画では、11月に李在鎬先生(早稲田大学)によるテキストマイニングのワークショップを、3月には早稲田大学名誉教授の村田久美子先生によるご講演をいただき、こちらも盛況のうちに幕を閉じることができました。(詳細は後述)

今年度、オンラインでの実施になってから、いずれの回も100名を越す申し込みがあり、こういう状況下でも、さらにご自身の授業や研究を研鑽されたいという、会員の皆様の高い意識と関心に圧倒されました。また他支部からの参加も増えたことは、関東支部のみならず、JACET全般の活性化にもつながることなのではないかと、運営サイドとして大変嬉しく、誇らしく思っております。改めて参加者の皆様に御礼申し上げます。

3) 支部紀要(JACET-KANTO Journal)の発行について

今年度より紀要がWEB化されることになりました。これにより、コスト削減のみならず、締め切りを1ヶ月ほど遅らせることが可能になり、今年度はちょうど、大会の直後が締め切りとなりました。今回、いつもの倍以上の投稿数があったことは望外の喜びであり、関東支部の研究を活性化していく上で、大きな弾みとなったと思われます。改めて、投稿者の皆様、今回の投稿論文だけでなく、今後の研究への示唆ともなるコメントを下さいました査読者の先生方、そして編集委員の先生方に衷心より御礼申し上げます。

4) ニューズレターの発行

関東支部では、半年に1度、ニューズレターを通じて支部活動をご報告しております。今年度に限り、支部大会に合わせて、ニューズレターの発行が10月末と3月末になりましたが、例年、9月末と3月末に発行しております。

ご承知のように、JACETは来年度60周年を迎えます。その際発行される記念誌に、関東支部が

らも過去10年間の活動報告を執筆致しましたが、その際、ニューズレターやJACET通信で、毎年の関東支部の記録をまとめてくださっていたことが、大変な手助けとなりました。改めて、ニューズレター及びJACET通信の意義を感じた出来事でした。委員の先生方に、改めて御礼申し上げます。

来年度より、山口高領先生（第5代支部長）にバトンを渡します。来年度はちょうどJACET 60周年記念に当たることもあり、大きなそして特別な1年となるかと存じます。新支部長の下での、関東支部の益々の結束、そして躍進を心より祈念しております。

この2年間、本当にありがとうございました。

第2回支部総会報告

支部事務局幹事

奥切恵（聖心女子大学）

2020年11月21日（土）にオンラインで、2020年度第2回支部総会が開催されました。支部総会では、2021年度支部事業計画・予算案及び2021年度支部人事についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。予算案については省略致します。

■2021年度支部事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催（1号事業）

(1) 支部大会の開催

名称：2021年度第14回JACET関東支部大会

日程：2021年7月11日（日）

目的：大学英語教育及び関連分野に関する調査・研究の発表を行うこと

形態：オンライン（総会時は帝京科学大学の予定でしたが、後日変更となりました）

大会テーマ：DX時代における大学英語教育

—ハイブリッド・ハイフレックス・対面型学習—

(2) 講演会及びワークショップの開催

名称：JACET関東支部企画

日程：2021年11月13日（土）

形態：オンライン

規模：約60名

目的：

- 1) 支部講演会のない月に実施することで、会員・非会員にとっての学びの場を提供する。
- 2) 研究者同士の交流・発展の場を提供する。

(3) 支部講演会の開催

名称：JACET関東支部講演会

日程：2021年6月12日、10月9日、12月11日の3回を予定

形態：オンライン

目的：

- 1) 支部講演会では、講演会を定期的実施することで、会員・非会員にとっての学びの場を提供する。
- 2) 研究者同士の交流・発展の場を提供する。

規模：毎回約60人

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行（2号事業）

(1) 『JACET関東支部紀要』第9号

（英語名：JACET-KANTO Journal）

日程：2022年3月31日

形態：オンライン

目的：

- 1) 広く原稿を募集し、支部会員の研究の活性化と質の向上を図る。
- 2) 既存の記事種別に加え、新たな種別の創設などを通して若手研究者の発掘・育成を試みる。
- 3) 査読を充実させることにより、様々な研究分野や研究手法を評価できるように努める。

(2) 「JACET関東支部ニューズレター」

日程：2021年9月30日（第17号）
2022年3月31日（第18号）
形態：オンライン（JACET 関東支部ホームページにPDFで掲載）
目的：支部活動の動向や支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行う。

Ⅲ. その他（5号事業）

(1) 支部総会の開催

名称：2021年度第1回、第2回関東支部総会

第1回

日程：2021年7月11日
形態：オンライン
目的：2020年度の支部の事業報告、会計報告及び2021年度の支部の事業計画

第2回

日程：2021年11月13日
形態：オンライン
目的：2022年度の支部の事業計画、予算案及び人事案の審議

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議
日程：2021年4月10日、5月8日*、6月12日、9月11日*、10月9日、11月13日、12月11日、2022年1月8日*、3月12日を予定（*2021年5月8日、9月11日、2022年1月8日については必要な場合に限って実施する。）
形態：オンライン
目的：関東支部における支部事業、研究会活動、運営の報告、及び活動報告の立案

■2021年度支部人事■

新規研究企画委員はおりません。

支部講演会委員会報告

支部講演会委員長

山本成代（創価女子短期大学）

■2020年度下半期活動報告■

2020年度下半期は、オンラインで2回の支部講演会が開催された。上半期は、4月11日開催予定だった第1回支部講演会が、新型コロナウイルス感染拡大のため、第1回JACET 関東支部・東洋大学共催企画で同じ内容で6月に開催された。そのため、本年度は、実質、下半期2回だけの支部講演会開催となった。10月3日には、國學院大學人間開発学部准教授の長田恵理先生をお招きして、「イタリアの小学校外国語教育—教材・教具を中心に」というタイトルでご講演していただいた。オンライン開催であったが、40名以上の参加者があり、スライドで示されるカラフルなイタリアの教材も十分に楽しめ、大変有意義な講演会だった。12月2日には、獨協大学外国語学部教授の浅岡千利世先生をお招きして、「英語教師の学びの過程と協同的振り返り」というタイトルでご講演していただいた。この日も、60名近くの参加者があり、参加者との活発な質疑応答からも得るものが大きい講演会だった。発表詳細については、後述の支部講演会報告・概要を参照されたい。

■下半期支部講演会 発表報告・概要■

日時：2020年10月3日（土）16:00-17:20

講師：長田恵理先生

（國學院大學人間開発学部准教授）

場所：オンライン

日本語題目：イタリアの小学校外国語教育—教材・教具を中心に

英語題目：Foreign language education in Italian primary schools: focusing on teaching/learning materials

報告：コロナの影響により、オンライン開催となった支部講演会だったが、40名以上の方が参加され盛況だった。発表者である長田先生は、昨年度、在外研究としてイタリアに滞在され、その際、調査された CLIL 授業における教材・教具とその使用について、多くの写真と共にご報告くださった。例えば、コピーブックと呼ばれるノートについて、単に情報を書き留めるだけではなく、児童が授業を通じた学びを、イラストや図、立体物などに整理し、ノートに貼り付けている様子や、児童が活動に能動的に参加するための準備に用いたりする様子は、日本の授業においても活用できる可能性があり、示唆に富むものだった。発表概要は以下に記載する。

発表概要：イタリアでは、2003年より小学校1年生から第一外国語として英語学習が必修となっている。日本と同様、小学校では原則担任が全科を指導することになっており、英語指導も例外ではない。現在、1年生が週1時間、2年生2時間、3～5年生3時間の英語の授業の他、地域や学校によっては CLIL やバイリンガル教育として一部の教科を英語で指導している。発表者はこれまでの実地調査からイタリアでは特にコピーブックと呼ばれるノートが指導上重要な位置を占めていると感じてきた。児童のノートやその他教材・教具を中心に、初等教育のカリキュラム、教員養成及び現職研修内容にも触れながら、イタリアの小学校外国語教育について報告した。

日時：2020年12月12日（土）16:00-17:20

講師：浅岡千利世先生

（獨協大学外国語学部英語学科教授）

場所：オンライン

日本語題目：英語教師の学びの過程と協同的振り返り

英語題目：Learning to teach through collaborative reflection

報告：コロナ禍の中、2回目の支部講演会がオンラインで実施された。年末にもかかわらず60名近くの参加者があった。英語教師の学びの過程やどのように振り返りをしたらいいのか等、英語教師として成長していくために必要な鍵を示唆してくれた。また、英語教員養成の現状や具体的な研修方法などに関する様々な質疑応答も活発に行われ有意義な講演会だった。発表概要は以下に記載する。

発表概要：2003年に発表された「英語が使える日本人の育成のための行動計画」に明記されている通り、教職課程では学部卒業段階で教員として必要な資質能力、すなわち英語力を確実に身につけさせることが求められている。2018年度から2019年度にかけて実施された大学教職課程の再課程認定においてコアカリキュラムが導入されたことにより、共通して習得すべき資質能力が明確化され、養成・採用・研修が一体化されたため英語中等教員養成・研修において実践的指導力の育成がより強調された状況下にある。しかし現状では理論と実践の乖離と時間的なアンバランス、さらに実践期間が短いことが課題となっている。本発表ではそのような実態を踏まえ、3つの研究から得た質的データを用いた分析・考察を行い、当の英語教職課程履修学生や現職教員は実際どのような体験を積み重ね、それらの体験と実践をどのように結び付けようとしているのか、そして、彼らの英語教師としての成長に影響を与えている要因と考え方の変化、特に一緒に考え意味を創り出す役割を担うピアやメンターの存在について報告した。教育課程履修者と現職教員に対して行ったケーススタディの結果、教師の成長には自分自身の振り返りだけではなく、他者が重要な役割を果たすことがわかった。協同的な振り返りには、言葉にすることで新たな気づきを生み、さらに他人に問いかけることで自分の考えが客観化され、その意味を再構築することができるよう

になるという効果があった。特に、near peer（経験値や年齢が少しだけ高く、話を聞き共に悩んでくれる人）や diagonal mentor（他教科や他の学校の教員など、利害関係がない斜め上の関係性の人）の存在が必要であった。また、英語教員養成における今後の課題や展望について検討を行った。

■2021 年度上半期活動計画■

2021 年度上半期は、6 月 12 日（土）に第 1 回支部講演会をオンラインにて開催予定。講演者は未定。決定され次第、JACET メーリングリスト等でお知らせします。

JACET 関東支部・東洋大学共催企画報告

JACET 関東支部

藤尾美佐（東洋大学）

■JACET 関東支部・東洋大学共催企画(第 2 回)■

日時：2020 年 11 月 21 日（土）16:00-17:20

場所：オンライン

題目：テキストマイニングに基づく学習者コーパス研究の理論と方法

講師：李在鎬（りじえほ）先生（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）

概要：

「テキストマイニングに基づく学習者コーパス研究の理論と方法」というタイトルでワークショップを行った。まず、理論の部分については、石田基広先生と金明哲先生によって編まれた『コーパスとテキストマイニング』（2012、共立出版）を紹介しながら、テキストマイニングが持つ研究領域としての汎用性・一般化について話した。その上で、コンピュータや統計モデルを使ってテキストデータを扱うにはどのような工夫が必要かについて紹介した。具体的には、「Web 茶まめ」

(<https://chamame.ninjal.ac.jp/>) や「jReadability」(<https://jreadability.net/>) を使いながら形態素解析のデモを行った。そして、テキスト分析の手順を示した。英語の解析ツールについても「BNP」(<https://parser.kitaev.io/>) や「TreeTagger」(<https://cental.uclouvain.be/treetagger/>) や「Stanford Parser」(<https://corenlp.run/>) などがあることを紹介した。そして、「DIKW ピラミッド」を利用し、テキストマイニングにおいて「データ」とはどのような性質を持っているのかについても話した。

次に、方法の部分については、学習者が書いた作文をテキストマイニングのためのプログラムを使って、分析する手順を話した。計量テキスト分析のためのフリーソフトウェア「KH Coder」(<https://khcoder.net/>)（樋口耕一先生が作成）を実際に操作しながら、分析の流れや解析の仕組みを説明した。分析データとしては、「The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students」

(<https://okugiri.wixsite.com/website/moecs>)（奥切恵先生らが作成）のエッセイデータを使用した。テキストデータの登録から解析、そして、KH Coder を使った集計方法を説明した。

最後に、「さらに勉強したい方」への情報として、4 冊の文献を紹介した。1) KH Coder の開発者である樋口耕一先生が書かれた『社会調査のための計量テキスト分析（第 2 版）』（ナカニシ出版、2020）、2) 本講演者（李在鎬）が編著者として作った『文章を科学する』（ひつじ書房、2017）、3) 小林雄一郎先生が書かれた『ことばのデータサイエンス』（朝倉書店、2019）、4) 石井雄隆先生と近藤悠介先生が編集された『英語教育における自動採点：現状と課題』（2020、ひつじ書房）である。

（文責 李在鎬）

■JACET 関東支部・東洋大学共催企画(第3回)■

日時：2021年3月13日(土) 16:00-17:20

場所：オンライン

題目：‘ELF’MI で‘WE と ELF’を学ぶ：学生の意識変化は？－英語教育への示唆

講師：村田久美子先生（早稲田大学名誉教授）

英語は現在、多様な場面で、多様な言語文化背景を持つ人々の間で使用される共通語（ELF: English as a Lingua Franca）となっている。日本でも（ELF を使いこなせる）グローバル人材の育成が大きな課題となっており、教育の場面では EMI（English-Medium Instruction）が大きな役割を担っているものの、この際の E（English）は、依然、アングロサクソン系の、特にアメリカを中心とした母語話者の話す英語を念頭に置きがちである。しかし、この E は ELF の視点を取り入れたものであるべきで、それを実際の教育の中にどのように反映していくか、つまりどのように ELF 使用に焦点を当てた教育・学習経験ができるかを、村田先生よりご講演いただいた。

実践例として提示いただいたのは、早稲田大学で 2016 年度より行われたカリキュラム改革（Harada, 2017）に伴い導入された、CLIL 及び EMI の授業の一部で、WE (World Englishes) and ELF をテーマにした授業である。この授業では ELF と WE の概念を理解するという授業目的を設定し、また留学生の参加による、より自然な ELF 環境の実現を試みた。（EMI の研究結果については、『教育評論』（早稲田大学教育総合研究所発行）も参照されたい。）

今回のご講演の中では、2017 年度、2018 年度に行われた授業（選択専門必修科目、受講者 40 名）の最後のクラスでの、学生のコメントの調査・分析結果を共有いただいた。授業の目的は、上述のように、1) WE と ELF の概念を学び理解し、2) グローバル社会での英語と英語使用に対する意識を高めること、授業方法としては、講義

のほかグループ・ディスカッションやグループ・プレゼンテーションが実施された。（EMI に関しては、以前の調査より、授業内容を第一義的な興味としながらも、英語力を増強したいという学生の要望も切り離せない点が明らかになっており、そのため授業方法に関しても、英語を使った意見交換や意味の交渉など、ディスカッションの機会を多くする工夫がなされた。）授業は、最初の 7 回を ELF に関する講義中心（+毎回 30 分程度のディスカッション）、後半をグループ発表中心に構成された。

授業最後の学生への質問は以下の 6 点であった。

1) 内容をどれだけ理解したか、2) 理解したことによりどれだけ意識が変化したか、3) EMI での授業はどの程度理解できたか、4) ディスカッションに積極的に参加できたか、5) ディスカッションには英語で参加したか日本語が多かったか、6) TA についての感想である。

質問 1) の「内容をどれだけ理解したか」に関しては 2017 年度が 90%、2018 年度 100%という回答であり、自由記述コメントでは、「ELF という概念も全く知らなかったため、面白かった」という意見が多く寄せられた。また、理解したエビデンスとして、「知識を得ただけではなく、英語に対する考え方が変わったから」あるいは「グローバル時代にどのような能力をつけるべきかを考えたから」という意見が出ていたのは、大変興味深い。また「多様性への理解や寛大さ」も挙げられており、特に、「この考えを知って救われた」「みんな違っていいんだ」というコメントは印象的である。外国語を学ぶ際には、どうしても母語話者が基準になりがちではあるが、小中高の教育の中で、文法や語彙の正確さに重きが置かれて、そこから解放されることがいかに難しいのかを表すコメントでもある。2) の「内容を理解したことにより、どれだけ意識が変化したか」に関しては、すでに 1) の回答で多くの部分がカバーされている。数値的には、2017 年度 87.2%、2018

年度 77.5%となっているが、2018 年度の受講生の数値が落ちたことに関しては、前年 Intercultural Communication という選択科目を受講していて、その際に既に ELF や WE に関する知識がついていたという事実も一因であると推測できる。3) 「EMI での授業はどの程度理解できたか」という質問については、教員の英語での授業と学生の発表を同じ質問として聞いたため、Yes は 2017 年度 57.9%、2018 年度 55.3%、Yes & No が 2017 年度・2018 年度ともに 18.4% という回答を得た。ただし自由記述をよく読むと、教員の説明はほとんどの学生が理解しており、学生の発表に関しては、学生の発表スキルの差も大きな要因であったことが伺える。また「EMI の授業に参加してよかったか」という問いには、2017 年度 81.1%、2018 年度 68.6% という回答が得られた。これは同時に Yes & No と答えた学生が 2017 年度 8.1%、2018 年度 17.1% となっており、自由記述回答から、学生は、内容理解に加えて EMI を英語のスキルを発展させる機会として捉えていたことも、再度明らかになった。4) 「ディスカッションに積極的に参加できたかどうか」については、Yes が 2017 年度 55.3%、2018 年度 59.0% である反面、No が 2017 年度 34.2%、2018 年度 35.9% と約 3 割に至っていた。ディスカッションに関しては、必ずしも全員が英語ではなく、日本語でディスカッションに参加していた学生もいたことを考えると、その要因は、英語力だけに限られたものではないことがわかる。また、5) 「ディスカッションには英語で参加したか、日本語が多かったか」という言語選択の問題に関しては、「TA が回ってきた時のみ英語」という回答もあったものの、「英語で参加」は 2017 年度 12.8%、2018 年度 45.0%、一方「日本語で参加」は 2017 年度 59.0%、2018 年度 25.0% と逆転現象が起っていた。この理由として考えられることは 3 点ある。1) 2018 年度はカリキュラム改革後 3 年目になり、これに伴い学生が慣れてきたこと、2)

担当教員が（沈黙よりは）ディスカッションは日本語でも良いということを奨励したこと、3) TA の存在である（2017 年度は 2 名の留学生と日本人院生 1 名の合計 3 名、2018 年度は 3 名の留学生と日本人院生・聴講生 2 名の合計 5 名であった。）そして、6) 「TA の存在」については、2017 年度 87.2%、2018 年度 94.9% がポジティブに知覚しており、特に 1) 受講生の講義内容の深化の助け、2) ELF の体現者、3) 異文化・多文化理解の促進者、として重要な役割を担っていたことがわかる。

こうしたことから、本研究では、1) 大多数の学生が ELF と WE の知識を習得したこと、2) 英語使用への意識変化が起こったこと、その結果、3) 英語使用への自信を抱いたことが明らかになった。また今後の示唆としては、1) ELF と WE の概念を教えることの重要性と 2) ELF 環境を与えることの重要性が示唆された。今回サマリーを担当している私自身も、実は数年前に、所属する経営学部で同様の授業を行ったことがある。当時の学生も、英語使用者は、英語母語話者より非母語話者の人数が圧倒的に多いことを知って驚いていたものの、ELF に関してのより深い読み込みをさせる重要性を、今回再認識した。またご講演の中にもあったが、EMI では、(母語話者の) 英語に捉われず、学生の母語も含めた様々なリソースを活用できる可能性が、もっと広く認識されることが重要だと思った。

Q&A のセッションも白熱し、1) 講義を通じて、知識として ELF や WE を理解させること（時代による定義の変化なども含む）と、授業内のディスカッションや TA との対話を通じて ELF でのコミュニケーションを体現することのいずれも重要であったこと、2) ELF と WE をわかりやすく学生に伝えるキーワードは、WE が community に根差した言語の特徴や性質に焦点を当てる一方、ELF はグローバル化での border-crossing や trans-langaging など含む言語とコミュニケ

ーションに焦点を当てること(Widdowson, 2015も参照)、3) ELF についての intelligibility は、話者個人の発話の中で担保されなかったとしても、インタクションの中で構築されることが可能である (Clarification request や Confirmation check などのコミュニケーション・ストラテジー使用も一例である) ことが話された。

最後に、個人的には大きく3つの示唆を受けた。1 点目は ELF や WE の概念を教えながらなおかつ体現していく、こうしたコースのさらなる普及の重要性である。この際、ELF の概念を深く洞察することが、実践と同様に重要であるという点である。第2点目としては、ELF の体現者 (学習者ではなく使用者) を育成するためには、様々な可能性があり、例えば演劇やミュージカルなど、五感の全てを駆使した、よりホリスティックなアプローチも取れるのではないかということ、第3点目は、プロフェッショナル・コミュニケーションの研究にも携わる私自身としては、一方で「母語話者の話す英語」という呪縛からなかなか離れられない学生と、そのようなことを言っていられない、プロフェッショナルな場面で英語を使用するビジネスパーソンとのギャップの深さも感じ、大学教員がそのギャップをどのように埋めていくか今後も考え続け、アカデミックな枠を超えたコラボレーションや教育の重要性も再認識した。

(文責 藤尾美佐)

支部大会運営委員会からのお知らせ

支部大会運営委員長
新井巧磨 (早稲田大学)

2021 年度の関東支部大会は、7 月 11 日 (日) に、Zoom を利用してオンラインで行われます。大会テーマは『English Language Education in Universities during the New Era of Digital Transformation: Hybrid, HyFlex, and Face to

face Learning (DX 時代における大学英語教育—ハイブリッド・ハイフレックス・対面型学習—)』です。今年度は新型コロナウイルスの影響により急な変更を迫られて基調講演を実施できませんでしたが、今大会では実施できるよう準備を進めております。また、今年度に引き続いて「SIG 発表」も実施される見込みです。プログラムや要綱などの情報は、準備が整い次第、支部 HP を通じてお知らせいたしますので、ご確認くださいませようお願いします。

さて、私事になりますが、3 期 (6 年) に渡り務めてまいりました支部大会運営委員長をこの 3 月をもって辞することとなりました。この任期中にお世話になりましたすべての先生方に心より感謝申し上げます。若輩者の私が支部大会運営委員長という責任のある立場で職務を全うできたのも、大会運営委員のみならず支部大会に関わってくださった皆様のおかげです。本当にありがとうございました。来年度の関東支部大会から新たな運営委員長に交代となりますが、今後とも JACET 関東支部大会をよろしく申し上げます。

支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長
鈴木彩子 (玉川大学)

支部紀要編集委員会では毎年 3 月末に紀要を発行しています。現在、2020 年度「関東支部紀要・第 8 号 (JACET-KANTO Journal Vol. 8)」完成に向けて、校正作業を行っています。以前にお知らせをしましたように、今年度からは Web で会員の皆さまに紀要をお届けすることになります。第 8 号には計 13 本の応募があり、厳正かつ公正な審査を経た論文 5 本と研究ノート 1 本を掲載しています。昨年度の紀要は 2 本の掲載でしたが、

今年度は倍以上の原稿を掲載することができ、非常に嬉しく思っています。

なぜこのように多くの掲載ができるようになったかを考えると、Web化によって締め切りが1ヶ月以上延び、応募しやすくなったことが大きかったように思います。それに加え、「紀要へ原稿提出をすると建設的なフィードバックがもらえる」ということが認知され始めたのかもしれない、と考えます。これまで同様に、査読者の先生方からは、応募原稿に対し厳しくも建設的なアドバイスやコメントをお寄せいただきました。その結果として、興味深い原稿6本を会員の皆さまにお届けすることが可能となりました。残念ながら掲載に至らなかった原稿もございますが、査読者の先生方からのコメントは次なる研究に活かされるものと信じています。

今年度は多くの原稿が集まったことにより、非常に多くの先生方に査読のご協力をいただきました。コロナ禍で通常よりもお仕事の多かった先生方もたくさんいらっしゃったと思いますが、そのような中でも「関東支部のためなら」と快く引き受けて下さった方がほとんどです。査読者の先生方にはこの場を借りまして、心よりお礼を申し上げます。

さて、上記でも言及しましたように、今年度からはWebでの発行となることで、これまで以上にアクセスしやすい紀要になると思います。ぜひ多くの会員の方に読んでいただき、そして、紀要から得た刺激を研究活動へ活かしていただきたいと思っています。

紀要編集委員会メンバー：鈴木彩子（委員長）、今井光子（副委員長）、大野秀樹、熊澤孝昭、鈴木健太郎、中竹真依子、濱田彰、Paul McBride（敬称略、50音順）

事務局だより
支部事務局幹事
奥切恵（聖心女子大学）

■JACET 関東支部企画・支部講演会のお知らせ■

下記のとおり、2021年度関東支部企画及び支部講演会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部HP、支部会員MLでお知らせいたします（諸事情により変更になる可能性があります）。

(1) 2021年度支部講演会の予定

2021年度 JACET 関東支部講演会（第1回）

日時：2021年6月12日（土）16:00-17:20

形態：オンライン

2021年度 JACET 関東支部講演会（第2回）

日時：2021年10月9日（土）16:00-17:20

形態：オンライン

2021年度 JACET 関東支部講演会（第3回）

日時：2021年12月11日（土）16:00-17:20

形態：オンライン

(2) 2021年度支部企画の予定

JACET 関東支部企画

日時：2021年11月13日（土）

形態：オンライン

■住所変更届提出のお願い■

転居やメールアドレス変更など登録情報変更の際には、JACET本部事務局へ変更届を提出してくださいませよう、どうぞよろしくお願ひいたします。

■ 斎藤早苗先生の追悼文 ■

このニューズレターが発行される直前に、長きにわたりニューズレター委員会、そして関東支部に多大なご貢献をいただいていた斎藤早苗先生の訃報が入りました。斎藤先生の優しく暖かなお人柄と笑顔を思い出すたび、涙が止まらなくなります。斎藤先生のこれまでのご貢献・ご功績に改めて敬意を表すると共に、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(関東支部長 藤尾美佐)

JACET-Kanto Newsletter 第16号

発行日：2021年3月31日

発行者：JACET 関東支部（支部長 藤尾美佐）

編集者：佐野富士子、下山幸成、
斎藤早苗、長田恵理

発行所：〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20
東洋大学経営学部
藤尾美佐 研究室内